

A・MUSEUM

vol.96
[2018.9.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



那珂湊層群が露出する海岸(ひたちなか市)



那珂湊層群から産出したスポン類の甲らの一部

茨城県から恐竜化石は見つかるのか？

茨城県ひたちなか市には、^{なかになかとそうぐん}那珂湊層群という^{きょうりゅう}恐竜時代の^{ちそう}海の地層がみられる海岸があり、ここからは中生代白亜紀のアンモナイトや二枚貝、ウニ、サメの歯の化石が報告されています。この海岸一帯は景観が素晴らしく、^{がくしゆつてき}学術的にも大変貴重であるため、茨城県の天然記念物および県立自然公園として^{ほご}保護されています。

当館を中心とする研究チームは近年、^{ぎよか}県の許可を得て那珂湊層群を調査し、モササウルス類などの脊椎動物化石を報告しました。河川に生息するスポン類の化石も見つかるため、恐竜の化石もいつか発見されるかもしれません。2019年2月から^{かいたさい}開催する「体験！発見！恐竜研究所 -ようこそ未来の研究者-」では、このような^{しやうかい}那珂湊層群の調査成果もご紹介いたします。(資料課 加藤太一)

第73回
企画展

くだもの展 –ギュッと濃縮！果物の魅力– Juicy Fruits! – The Fascinating World–

みなさんは果物が好きですか？芳醇な香りと爽やかな味わいが魅力の果物。現在、日本各地でその気候風土に合うさまざまな果物が栽培されています。輸送技術の向上もあり、新鮮な果物を手軽に入手できるようになりました。そんな、身近な存在の果物ですが、どのようにその果実ができるのか、どんな花を咲かせるのかを知らずに食べていることも多いのではないのでしょうか。何気なく目にする果物にも、その数だけ、形や色、香り、花のつくり、果実のつき方など、多種多様な特徴があるのです。果物の外見とは想像もつかない美しい花を咲かせるものもあります。

私たちが利用している果物は植物学的には種子を含んだ果実であり、鳥やけものに食べさせることで種子を散布するという大切な役割を担っています。しかし、種なしの果物など、果実のつくりにおける本来の役割がそぎ落とされているものがあります。私たちが食べている果物は、色や形を良くしたり、糖度を最大限に高めたりするなど、消費者から好まれる理想の姿に近づけたものです。流通している多くの果物は、幾重にも品種改良が行われたものだということはあまり意識されていないことではないでしょうか。

今回の企画展では、さまざまな角度から果物にスポットを当て、その魅力を紹介します。果物の多様性

を中心に、野山で見られる果物、動物とのかかわり、茨城県で生産されている果物、ルーツや品種改良、栽培の最新技術などについても解説します。

果物は私たちの暮らしに彩りや潤いを与えてくれる存在です。「くだもの展」をきっかけにあまり知られていない果物の魅力を知り、さらに果物を好きになってもらえると嬉しいです。

2018年10月6日、博物館から実りの秋が始まります。
(資料課 豊島丈夫)

展示構成

- 第1章 果物とは？
- 第2章 果物の多様性
- 第3章 野山の果物
- 第4章 果物と動物
- 第5章 茨城の果物
- 第6章 私たちと果物
- 第7章 果物の歴史
- 第8章 果物のこれから



バナナの若い果実(上)と花(下)



ナシの花(品種:新高)



果物の王様とよばれるドリアン

会 期 2018年10月6日(土)から2019年1月27日(日)まで

※10月6日(土)は午後1時からの公開となります。

開館時間 9:30~17:00 (入館は16:30まで)

休 館 日 毎週月曜日 (※10月8日(月)は開館し、翌日が休館となります。)

●自然講座 フクレミカン観察会

日 時：11月4日(日) 10:00~12:00

場 所：桜川市(現地集合)

対 象：小学生以上(小学生は保護者同伴)

定 員：30名

備 考：別途入園料がかかります。

●自然講座 もっと知りたい!くだもの学

日 時：12月23日(日・祝) 13:00~15:00

講 師：塚谷裕一氏(東京大学)

場 所：博物館内

対 象：小学生以上(小学生は保護者同伴)

定 員：280名

企画展のタイトル決定と図面制作

企画展ができるまで 2

シリーズ「企画展ができるまで」の2回目は、「タイトル決定」と「展示室の図面制作」を紹介します。

企画展のタイトルは、まず担当メンバーそれぞれが複数の案を出し合い、話し合うところからはじまります。出された案について、一般の方がタイトルを見て企画展のテーマや趣旨が伝わるか、興味をもってもらえるか、シンプルで印象的なものか、などを吟味しながらさまざまなことばの組み合わせを考えます。そして、徐々に絞り込んで最終的に1つの案に決定します。2016年の秋に開催した「外から運ばれて来た生き物たち—Youはどうして日本へ?—」というタイトルは、外来生物をただの悪者にするのではなく、人に運ばれてきた生きものであるということを知ってもらいたいという思いが込められています。余談ですが、この企画展の館長との打合せでは、「サブタイトルは、テレビ局からの許可が必要じゃないのか。」との助言もあり、テレビ局への確認を経て決定となりました。

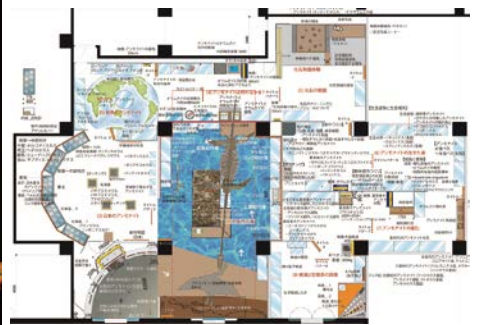
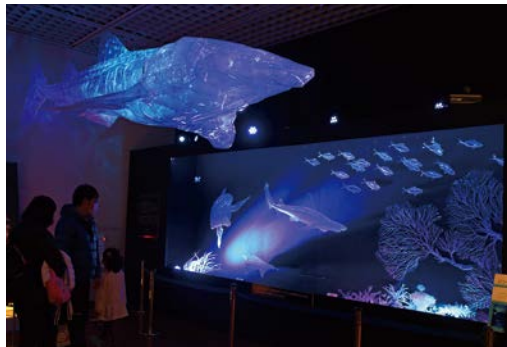
展示室の設計図面は、展示構成をもとに調査で得られた標本、画像、映像を整理し、図面制作を専門とする経験豊富なデザイナーと展示アイデアを出し合いながら、図面上に配置していきます。ただ標本を並べるだけでなく、テーマにあわせて「触る・かぐ」など体験的なものや小さな子どもが楽しめるコーナーを取り

入れるなどの工夫をしています。

ここで、企画展のチーフが最も頭を悩ませるのが、展示室の入り口に配置する「アイキャッチ」と中央部に配置する「シンボル」と私たちがよんでいる展示物です。アイキャッチは展示導入部として、目を引く美しいものや珍しい資料を配置します。2017年の秋に開催した「サメ展」では、アイキャッチとしてペットボトルで制作されたジンベエザメが美しい照明とともに展示されました。シンボルには、2階の第5展示室出口から見える吹き抜けの部分に、ひときわ大きな資料や大規模な体験コーナーなどを配置します。2017年の春に開催した「アンモナイト・ワールド」では、24㎡のアンモナイトの群集化石と全長約10mの首長竜のタラソメドンが配置されました。これらアイキャッチやシンボルは常設展示に移設されることもあります。2002年の「時を超える生き物たち」では、茨城大学にあった約30mのメタセコイアを標本化してシンボルとし、企画展終了後には恐竜ホールに移設し、現在も展示しています。アイキャッチ、シンボルは、調査で得られた資料や情報とアイデアを結集した企画展を象徴するものといえます。

企画展をご覧になりながら、メンバーの思いを想像していただければ幸いです。（資料課 中川裕喜）

採用	外から運ばれて来た生き物たち —Youはどうして日本へ?—
不採用	<ul style="list-style-type: none"> ・みちかなエイリアン ・外来種天国 日本 ・連れてこられただけなのに... ・人のいいぶん 外来種のいいぶん ・ゆらく日本 生物勢力分布 ・俺たちだって好きで来たんじゃない ・外来種物語 ・増える 広がる 害をなす ・エイリアン 大搜索! ・アライグマの涙 ・境界を越えた生き物たち ・外来種今でしょ講座 ・外来種ですが、何か? ・進撃の外来種



第67回企画展タイトルと不採用案

第70回企画展「サメ展」アイキャッチ

第68回企画展「アンモナイト・ワールド」図面

岩石の展示

当館の第2展示室には、岩石や鉱物、化石が展示されています。その中では、どうしても恐竜に目がいき、ほかの展示への関心が薄くなってしまふようです。入り口のすぐ近くに、「岩石のできる場所」という展示があります。この展示は、単に岩石を並べたわけではなく、日本にある岩石の多くは、中央海嶺や深海でできたものやハワイのような海山でできたものが海洋プレートによって運ばれ、付け加わったことを示して

館長コラム by director YOKOYAMA

います。私たちの身近にある岩石は、その場所でできたのではなく、遠くから運ばれたものが多くあることを学んでもらえればと思います。「岩石のできる場所」の展示は、私が30年ほど前に国立科学博物館の新宿分館の展示としてつくったもので、今は上野の日本館3階に移設し展示されています。ほぼ同じものを、当館の開業時につくって第2展示室に設置しました。展示物としては古くなっていますが、内容は今で

も陳腐化していないのが幸いです。



イラスト：美濃口麻里（ミュージアムコンパニオン）

実録！クマカメラでのぞくクマの食べもの

研究報告

野生動物の食べものを調べるには、直接観察する、食べ痕を見つける、糞や胃の内容物を調べるなど、いくつかの方法があります。しかし、森林に住むツキノワグマの食べものを調べるとなると、直接出会うことは難しく、また山中を歩き回ってもなかなか痕跡や糞を見つけることができません。

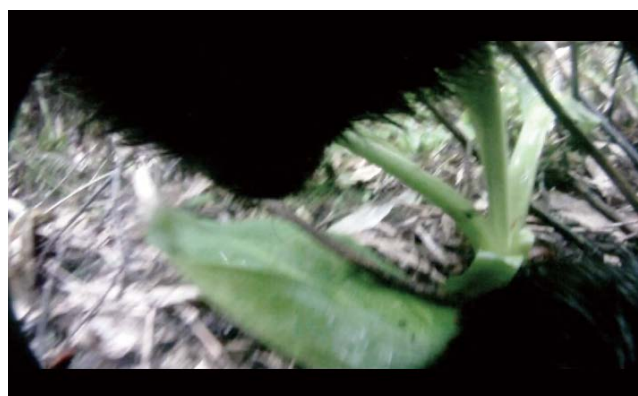
それなら、クマの首にビデオカメラをつけて、クマ自身に食べているものを撮影してもらおう！と首輪型のビデオカメラ、通称クマカメラを開発しました。クマが歩いているときには首の下にカメラがくる構造で、撮影された映像には画面の上側にクマの下あごが常に映っています。そのため、何をどのように食べたかをはっきりと知ることができます。

何頭かのクマに装着した結果、ミズバショウの葉やセリ科の植物の茎、ヤマブドウの果実など、食べものの9割以上が植物であることが分かりました。人間も大好物であるチシマザサのタケノコを食べるときは、口を使って上手に皮を剥いていることも分かりました。また、繁殖期にオスがメスと一緒に過ごすようすや、メスに走って逃げられてしまう姿なども撮影され、これまでは調べるのが難しかったクマ同士の関係性についても、垣間見ることができました。



オスグマにつけたカメラに映ったメスグマ

さらに、クマカメラを用いた研究では、誰が見てもその成果が分かりやすいというメリットがあります。数値やグラフ、言葉では説明することが難しいクマの生態を、クマ自身が撮影した映像を見ることで、クマの目線になって考え、感じるすることができます。まさに「百聞は一見にしかず」です。これまでに蓄積した映像は、NHKの「ダーウィンが来た！」という自然番組でも紹介され、クマの新たな一面をお伝えすることができました。まだまだ装着事例は少ないのですが、今後も個性あふれるツキノワグマの生態を明らかにしていきたいと思います。（資料課 後藤優介）



ミズバショウの葉柄を食べているところ



手で水たまりをかきまぜているところ

納豆をつくる納豆菌

茨城県で有名な食べものといえば納豆です。茨城県では、源義家の家来が馬に食べさせるために煮た豆を、糞に詰めて貯蔵したことから生まれましたと伝えられています。

納豆は、納豆菌(*Bacillus subtilis* var. *natto*)によってつくられます。納豆といえばネバネバが特徴的ですが、実はそれは、納豆菌がアミーバなどの外敵から身を守るためのものであったり、栄養が少なくなったときに食べる非常食として使われたり

します。賞味期限が切れると糸引きが悪くなるといいますが、それは納豆菌自身がネバネバを食べてしまうためです。納豆のネバネバは、グルタミン酸と糖の一種からなります。納豆をたくさんかき混ぜると美味しくなるといわれるのは、そのネバネバ成分がちぎれて、旨味成分であるグルタミン酸が多く出てくるためです。

身近な食べものですが、実は奥深い納豆。ぜひ、今晚のおかずにか

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—

がでしょうか。
(ミュージアムコンパニオン 小平えり)



納豆と納豆菌の電子顕微鏡写真(右上)

モンゴルの昆虫

海外調査報告

6月24日から30日にかけてモンゴル国での昆虫調査に行ってきました。参加者は博物館職員2名（中川、西元）、当館ボランティア昆虫チームの3名（山川、廣澤(英)、廣澤(令)）、そして現地ガイドと運転手の計7名で1週間を過ごしました。

成田から飛行機で約5時間、異国での昆虫調査がはじめてのため、期待と不安が入り混じったままモンゴルに到着。空港のある首都ウランバートルから車で東へ約2時間、今回の主とする観察地であるテレルジに着くと、そこには雄大な自然が広がっていました。草原ステップでは、人よりも何倍も多くの牛や馬、ヤギや羊などの家畜が悠然と草を食べていました。1週間天候にも恵まれ、気温は連日30℃近くの暑い日が続きましたが、湿度が低く、標高約1800mのテレルジでは不思議とあまり汗をかきませんでした。どれも事前に活字では把握していましたが、体験してみると、全く違い、1つひとつに深い魅力がありました。

さて、各機関から許可を受けた今回の調査ではチョウ類を中心に採集を行いました。なかでも今回の目的はアポロウスバシロチョウ（通称アポロ）とオオアカボシウスバシロチョウ（通称ノミオン）。どちらもパルナシウス属のチョウです。最初に現れたノミオンが



オオアカボシウスバシロチョウ

大きな感動を与えたのも束の間、この時期のモンゴルではどの調査地においてもノミオンを多数観察することができました。一方、アポロはなかなかその姿を見せないため、ガイドや運転手も含めて可能性が高い場所を何度も検討しました。それが功を奏したのか、ノミオンよりも一回り大きいアポロは、少数ながらも限定的な場所で確認することができました。広大な草原を優雅に飛翔するモンゴルのチョウ。日本と違い、障害物が少ないモンゴルではその飛翔をどこまででも追うことができました。

夜には満天の星空が広がり、宿泊したゲル（遊牧民が使用する移動式住居）では暖炉に火がとまります。朝は洗濯物を現地の人に俵で外に干し、そしてまた1日チョウの調査に歩を進める。そんな罅で生涯忘れることのできない一週間でした。異国の地で文化に触れながらその生態系を調査することで、人間性も磨かれた気がしています。今回の調査によって、当館の収蔵庫に貴重な標本が加わりました。これらの標本は、次の昆虫展でみなさんにお披露目する予定です。

一緒に過ごしたすべての人々、そしてモンゴル国に感謝します。パイラルラー！（教育課 西元重雄）



広大なステップでの昆虫採集

ひょっこり出てくるイソギンポ

本館の第3展示室、水の生き物コーナーにはイソギンポという隠れ上手な魚がいます。普段は岩陰や隙間に隠れていますが、ときどきひょっこりと顔を出して、みなさんの前に現れます。

イソギンポは体長約6cmの小さな魚です。うきぶくろをもたないため、沿岸の岩礁の底などに生息しています。体色は茶褐色で、上顎には犬歯のような鋭い歯があり、小さなエビなどを食べるすることができます。

また、つばらな瞳の上には皮弁というものがあり、これを水中でゆらゆらと揺らしている姿が水槽内で見られます。

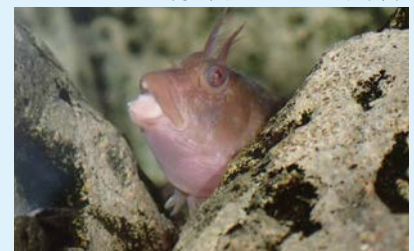
そして、私たちが魚たちにエサを与えるために水槽に近づくと、イソギンポは岩の隙間や陰からこちらをじっと見つめ、今か今かと待ち構えます。エサを見つけると素早い動きで食べ、再び隠れてはようすを見ている。

一見地味な姿をしていますが、1

おさかな通信

つひとつの動きがとても可愛いイソギンポは海の水槽にいますので、ぜひ探してみてください。

（水系担当 金邊天平）



イソギンポ

陸上植物化石「クックソニア」「ライニーチャート」

収蔵品紹介

地球の生命は約38億年前に海で誕生したと考えられています。約4億年前には植物が最初に上陸し、今日では陸上でも多くの生物が生活しています。今回は陸上に進出して間もない頃の植物の姿や生態を知る上で重要な化石を紹介します。

1点目は、現在知られている中で最古の陸上植物化石クックソニアです。この化石は、古生代シルル紀中期（約4億3000万年前頃）以降の地層から見つかります。高さは数cmで、二叉に分かれた軸の先端に胞子のうが付いているだけの単純な形の植物だったようです。この時代の植物の多くは乾燥には耐えられず、生

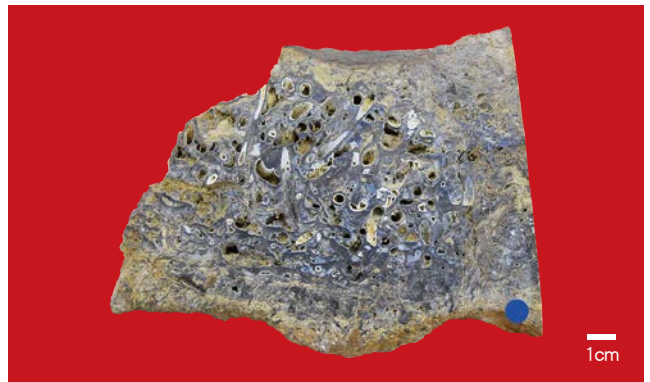


最古の陸上植物化石クックソニア

育地は沼地などの湿った場所に限られていました。

2点目は、初期の陸上植物化石を含む岩石、ライニーチャートです。これは、古生代デボン紀（約4億年前頃）に湧き出した温泉水の珪質成分が沈殿してできました。この岩石には、植物以外にもさまざまな節足動物の化石が立体的に保存されており、当時の陸上の生態系を知るうえで貴重な資料となっています。

これらの化石は、第2展示室で展示されています。普段は動物化石の陰に隠れて目立つことの少ない植物化石ですが、ぜひこの機会に注目していただけだと思います。（資料課 高野朋子）



初期陸上植物化石を含む岩石ライニーチャート

落ちる葉っぱと落ちない葉っぱ

なるほど博物館 いばレックスとコティランが自然に関する情報をわかりやすくお伝えします。



いばレックス

もうすぐ秋だね。秋といえば紅葉狩り！真っ赤なモミジを見に行くと、癒やされてリフレッシュできるよね。

うーん。ぼくは、紅葉狩りよりも果物狩りがいいな。ブドウ、ナシ、クリ…、あー、でもやっぱりお肉のほうがいいな！



コティラン

コティランは食いしんぼだね。もう少し大人になったら、紅葉狩りのよさが分かるかな。赤や黄色に色づいた葉っぱが、風に乗ってぱらぱらと落ちるようすも、はかなくてすてきだよ。

どうしてモミジは葉っぱを落とすの？

いい質問だね。それはね、秋に葉っぱの寿命が来るからだよ。それからね、秋が終わってやってくる冬は、葉っぱにとって厳しい季節なんだ。葉っぱには、太陽の光で、二酸化炭素と水を栄養に変える「光合成」という役割があるのだけど、冬の寒さや乾燥は「光合成」には向かないんだ。

なるほどね。でも博物館のツバキは、秋になっても葉っぱが緑色で落ちないよ。どうしてかな？

いいところに気づいたね。秋になっても落ちない葉っぱは、寿命が長い葉っぱなんだ。ほら、ツバキの葉っぱは厚くて丈夫そうでしょ？これなら、冬の厳しい寒さや乾燥にも耐えられるんだよ。

じゃあツバキはずっと葉っぱがついているんだ！

それはどうかな？じつはよく見ると、ほかの季節に葉っぱを落としているんだよ。

えー。そうなの。気がつかなかった！

秋になっても落ちない葉っぱも、2～3年たつと寿命が来て落ちるよ。春になって新しい葉っぱが出てくるころに、一斉に落ちることもあるよ。

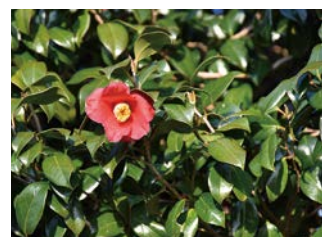
じゃあ、落ちない葉っぱはないってこと？

そういうことだね！

（資料課 伊藤彩乃）



秋に落ちる葉っぱ(イロハモミジ)



秋に落ちない葉っぱ(ヤブツバキ)

トピックス

○世界湖沼会議とNORNAC

世界湖沼会議とは、世界中から研究者・行政機関・市民などが集まり、世界の湖沼における環境問題やそれらの解決に向けた取り組みについて議論する国際会議です。2018年10月に茨城県で開催されることになり、現在、準備が進められています。茨城県で世界湖沼会議が開催されるのは、1995年に第6回会議を開催して以来、23年ぶり2回目となります。5月26日から6月6日には世界湖沼会議を紹介するパネル展示を、茨城県生物多様性センターの協力を得て、当館1階の講座室前で行いました。開催当日も当館では、研究発表や展示などで協力していきます。

NORNAC（ノルナック、自然系調査研究機関連絡会議）とは、自然の調査研究を行っている国や地方自治体の機関が情報交換を行う会議です。11月29日には当館を会場として調査研究、活動事例発表会が行われます。一般の方もご覧いただけますので、ぜひお立ち寄りください。世界湖沼会議とNORNACの2つの会議が自然環境の保全に関心をもつきっかけになれば幸いです。（企画課 鷗沢美穂子）



世界湖沼会議を紹介するパネル展示のようす

○鉱物でワールドカップ2018！を開催

今年は4年に1度のFIFAワールドカップが開催され、日本代表もグループリーグを突破するなど、大活躍しました。当館では、このワールドカップの期間中、所蔵標本で参加国を紹介する特別展示「2018W杯出場国による鉱物でワールドカップ！」を行いました。

展示では、参加32か国から産出した鉱物のうち各国の代表的な鉱物種を所蔵標本から選んで紹介しました。ちなみに、ブラジルは鮮やかなカナリア色をした「ブラジリアナイト」、魅惑的なサッカーをするスペインは立方体の美しい「黄鉄鉱」、そして日本はチョウのように羽ばたくことを願って「日本式双晶（水晶）」を選びました。

展示では、来館者のみなさんはあまり馴染みのない国についても高い関心をもたれていました。

結晶トーナメント(?)の結果、第3位が菱亜鉛鉱（ベ

ルギー）、準優勝が鉄電気石（クロアチア）、優勝は白鉄鉱（フランス）となりました。白鉄鉱は湿気でばるばるになりやすいですが、今回のフランスは結束力が固く、優勝を勝ち取りました。（教育課 小池 渉）



特別展示のようす

（中央赤台：優勝した白鉄鉱（フランス）、左下：日本式双晶（水晶）（日本））

○自然観察会「ペルセウス座流星群を観察しよう！」

8月12日（日）に自然観察会「ペルセウス座流星群を観察しよう！」を実施しました。41人の参加者は、職員による流星群についてのレクチャー後、博物館の屋上から星空を観察しました。

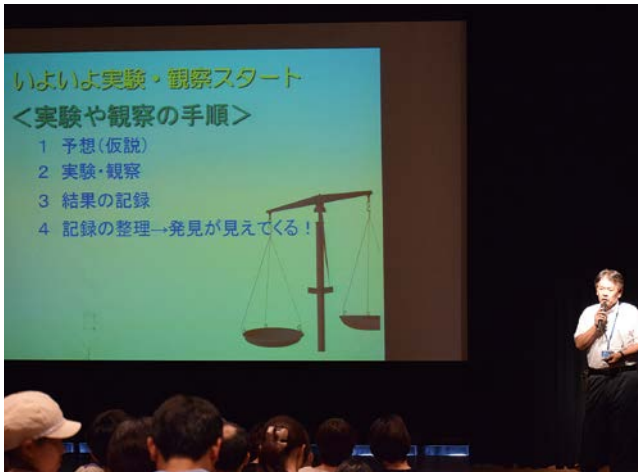
流星群とは、毎年同じ時期に空の一定方向（放射点）からたくさん流れ星が出現する現象のことです。流星群には放射点の位置する星座の名前をつけますが、三大流星群と呼ばれる「しぶんぎ座流星群」「ペルセウス座流星群」「ふたご座流星群」は毎年多くの流れ星を出現させることで知られています。今年のペルセウス座流星群は、月明かりがない好条件のため、たくさんの流れ星が期待されていました。しかし、当日はあいにくの曇り空。ところが、いざ屋上に出ると博物館の上空は雲の切れ間となり、いくつかの流れ星を観察できました。また、夏の大三角や木星なども見られました。

これから秋は、月の美しい季節となります。秋の夜長には、ぜひ夜空を見上げていただければと思います。（資料課 高野朋子）



観測会のようす「あっ木星が見えた！」

理科自由研究のヒントを見つけよう



自由研究の進め方の解説



個別に質問に答える学芸系職員

7月21日(土)に、当館の特別イベント「理科自由研究のヒントを見つけよう」を開催しました。このイベントは、毎年小中学校の夏休みに入る前後に、児童生徒とその家族を対象に行っています。

その内容は、理科自由研究の進め方やその具体例を専門の学芸系職員が分かりやすく解説するものです。当日は多くの参加者を迎えて実施されました。

はじめに、当館教育課長が研究の全体的な進め方を具体例を交えて解説しました。続いて、植物、動物、地学の各研究室の学芸系職員が映像資料や調査用具、材料などを使ってそれぞれの分野における研究の具体的なヒントを紹介しました。植物研究室からは「ふしぎいっぱい 変形菌のひみつをさぐれ!」、動物研究室からは「すごいぜ! 昆虫!!」、地学研究室からは「地学ってなに? -自由研究で地学にチャレンジ-」というテーマで研究のヒントにつながる具体例が紹介さ

れました。それらの説明の後には、個別に質問を受ける時間を設定しました。参加者からたくさんの質問があり、学芸系職員がそれに丁寧に答えていました。なお、随時インストラクターズルームをとおして各研究室の職員が研究の相談に応じています。

児童からは「自由研究のヒントが見つかった」、保護者からは「自由研究は難しいと考えていたが、今日のイベントを参考に夏休みにぜひ挑戦させたいと思った」などの感想がありました。(教育課 大藤克義)

編集後記

10月6日から第73回企画展「くだもの展」を開催します。カラフルな展示がみなさまをお迎えします。身近な果物ですが、一度に見られる機会はあまり無いので、ぜひ見て・かいて魅力を存分に楽しんでいただけたらと思います。(SF.)

[交通案内]



- 車ご利用の場合
 - 常磐自動車道谷和原ICから20分
 - 圏央道坂東ICから25分
 - 鉄道・バスご利用の場合
 - 東武アーバンパークライン(野田線)愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
 - つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅下車～関東鉄道バス「岩井/スターミナル行き」乗車～「自然博物館入口」下車徒歩5分
- ※事前に発車時刻等をご確認ください。



[開館時間]
9:30から17:00まで
(入館は16:30まで)
※ペット、遊具、テーブル、椅子及びベンチ等のお持ち込みはご遠慮ください。

[入館料]

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
一般	740円 (600円)	530円 (430円)	210円 (100円)	1,540円
	370円 (300円)	260円 (210円)	100円 (50円)	
高校・大学生	450円 (310円)	330円 (210円)	100円 (50円)	1,030円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	310円

※()内の数字は、20名以上の団体料金です。
※県外の学校団体は、児童生徒数にかかわらず団体料金がかかります。次の日は入館料が無料です。
●5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
●11月13日(茨城県民の日) ●3月21日(春分の日)
●高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)
●高齢者(満70歳以上)
1月、4月、7月の第3土曜日、9月15日～9月21日(老人週間)(ただし、休館日を除きます。)
[休館日]
●毎週月曜日
※9月17日(月)、9月24日(月)、10月8日(月)は開館し、翌日が休館となります。



自然博物館ニュース A・MUSEUM (ア・ミュージアム)

企画・編集:ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2018年9月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL.0297-38-2000 FAX.0297-38-1999
URL <https://www.nat.museum.ibk.ed.jp/>
E-mail webmaster@nat.museum.ibk.ed.jp



ミュージアムパーク茨城県自然博物館友の会
入会すると入館料が無料に! (年会費)
家族会員 4,000円 個人会員 3,000円
子ども会員 1,000円 賛助会員 10,000円
※特典 イベントへの参加、ショップ・レストランでの割引

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。